

棚田学会通信

第60号 目次 2020年3月16日発行

ITLA第4回世界傾斜農地会議参加報告	2
グラン・カナリア島の傾斜農地	3
棚田学会発表会開催報告	4
棚田学会発表会参加記	7
日本の棚田紹介	7



写真上：「古代米祭」の田植え（だんだんの会 2019年6月2日）
写真下：児童に好評の大峰環境学井戸水体験（桃野小学校5年生 2019年6月28日）

（写真提供：棚田百選紹介筆者）

ITLA2019 (International
Terraced Landscape Alliance)
第4回世界傾斜農地会議参加報告

ハイランドパーク 棚田学会理事 上野 裕治

1. はじめに

2019年3月13日から22日の間、10日間にわたってITLA2019がスペイン領カナリア諸島にて行われた。筆者は全期間フルに参加してきたのでその内容について報告する。会議は次の3つのセッションに分かれて行われたが、この方式は前回2017年イタリア大会の時と同じ構成である。参加国20ヶ国、参加者数は約200名（一部参加を含む）とのことであった。

<ブロック1>

3/13~15 グランカナリアにて全体の討議およびテーマ毎の発表。

<ブロック2>

3/16~18 八つの島々、15チームに別れてのフィールドワーク。

<ブロック3>

3/19~22 全員がラ・ゴメラ島に再集合し、フィールドワークチーム毎の発表とクロージングセッション。

2. 全体討議およびテーマ毎のセッション

全体討議ではスペインを中心に各国の現状と問題点などについて発表が行われた。全体を通してのイメージとしては、各国とも共通した課題は「耕作放棄地」ということだろう。放棄される原因は後継者不足、作業性や効率性の悪さなどで、その結果として石垣や斜面の崩壊、雨水保持力の減少など、ほとんど日本の棚田での悩みと同じとあって良い。



写真1 テーマ毎のセッション発表風景、
「棚田とカカシ」発表中

テーマ毎のセッションは Working、Learning、Living、Wisdom、の4テーマで行われ、それぞれ6件前後の発表があり、筆者は Living のセッションで「棚田とカカシ - 比礼カカシプロジェクト -」の発表を行った。内容的には昨年の棚田学会大会シンポジウムで発表したものに同じく、日本におけるカカシの歴史と筆者らが長岡市比礼地区にて実施しているカカシプロジェクトについて報告した。カカシは稲作文化圏だけではなく、小麦文化圏など世界中に存在するため、多くの参加者に興味をもっていただいた。

3. フィールドワーク

筆者はランサローテ島のセッションを選択した。カナリア諸島全体が火山でできた島々であるが、ランドスケープ的に見てもこの島は非常に特殊な島で、私はぜひ一度行きたいと思っていた島であった。この島は約300年前に島中が噴火し、現在でも島中に数多くの噴火口の跡がある。そしてその多くの土地が火山砂利、火山灰で覆われ、また年間降水量が500mm程度という環境の中、特殊な栽培方法でブドウを栽培し、ワインを醸造しているのである。まるで蟻地獄のような窪地の中にブドウを一株植え、周囲は風を防ぐために石積みがあったり、あるいは格子状に石積みをして格子の中にブドウを植えるといった方法だ。水分は夜間に空気中の水蒸気を地表の黒い砂利層がキャッチし、それだけで生育している。そこで生まれるワインはまさに非効率的であり生産量も極端に少ないワインであり、結果的に輸出どころか島外にもあまり出されていないがそのファンは多い。ワインの生産だけでは農業経済的にはおそらく成立していないが、この特殊性をワイナリーツアーなどツーリズムとして売り出し、多くの来客を集めていることは、日本の棚田地域も見習うべきであろう。



写真2 ランサローテ島のブドウ栽培

4. クロージングセッション

フィールドワーク各チームの報告はとても興味深いものであった。カナリア諸島全体が二つの県からなるほど非常に広く、またスペイン国内で最も高い山はその中のフェネリフェ島にあり、ほぼ富士山と同じ3700m級の山である。このような島々の中で、農業環境も様々であり、また課題も様々である。私の参加したチームではランサローテ島の特殊環境下におけるブドウ生産とワイン醸造、ヤギの飼育とチーズの生産、古くからラクダが荷役動物として移入されたことなどを報告した。またこれらの現況を受けて今後のビジョンとアクションプランをまとめ、参加者で議論したものを発表した。また最後に各国の棚状農地景観のセッションの中で、山路会長と連名で筆者が「日本の棚田と里山」というタイトルで発表した。

5. 全体を通して

今回の会議の進め方で非常に印象的だったのは、「グラフィック・レコーディング」という手法が活躍したことだ。前回のイタリア大会では最後のアジェンダを示すのに使われたものであるが、本大会のような多国籍、多言語の会議において、グラフィックで発表内容を同時進行的に表現していく手法は非常に有効だ。広義にはトイレマークなどのピクトサインや地下鉄の路線図などのグラフィックを含むインフォ・グラフィックスという概念の中に含まれるが、発表を聞きながら即興的にグラフィックとしてまとめていくところに特徴がある。聞き取る、理解する、グラフィックとして表現する、という技術が必要になるが、今後のこのような会議においては広まっていくことだろう。このような表現手法も含めて大変有意義な会議であった。



写真3 グラフィック・レコーディングの例
フィールドワークのまとめ、
コンセプト・グラフィック（上野作成）



写真4 上野発表「日本の棚田と里山」を
地元チームがグラフィック化したもの

グラン・カナリア島の傾斜農地

東京大学新領域創成科学研究科教授 山路 永司

1. ITLA の活動

棚田はその多くが中山間地の山中に立地するため、多くの人々からは忘れられた存在でもあった。石塚克彦元副会長は棚田の魅力を発見し人々に紹介した。棚田を抱える自治体もその保全対策のため全国棚田（千枚田）連絡協議会を結成し棚田サミットを開催している。棚田を愛する市民はNPO法人棚田ネットワークに結集し様々な保全活動に取り組んでいる。そして棚田学会は、研究活動を中心としながらも様々な視点から棚田保全を考えている。

このように日本には棚田を愛する人々・団体が少なからずあるが、同様の国際的な組織があることは最近まで知らなかった。その団体はITLAという。2010年に中国・雲南省で初めての集まりを持ち、2014年にはペルーで、2016年にイタリアで、2019年にカナリア諸島で開催された。ITLAはまたヨーロッパ各地で小さな集まりを多数開催している。

筆者はカナリア諸島大会のブロック2であるフィールドワークに参加することができた。

2. カナリア諸島

カナリア諸島は大西洋の海底から火山活動によってできた島々であるため、平坦地が少ない。主産業は観光業・港湾サービス業で、農業の比重は低い（農業・水産業への就業比率は2.56%）。

主要農産物は、バナナ、トマト、ジャガイモ、キュウ

ウリ、ピーマンなどで、バナナは殆どがスペイン本土に輸送されている。また、トロピカルフルーツ、花木等の栽培も進められている。

ブロック1の開催地であるグラン・カナリア島は、古くから交通の要所として栄え、中心都市ラス・パルマスはカナリア諸島で最も人口が多い。

3. グラン・カナリア島北部コース

ブロック2のフィールドワークは15のコースで行われ、筆者はグラン・カナリア島北部コースに参加した。本コースのコーディネータは、地元の建築家であり大学でも教えるリカルドさん。参加者は11名で筆者以外はすべてスペイン人（スペイン本土からとこの島から）だった。

2泊3日の行程で、島の北部中央に位置するフンカリジョ（Juncalillo）村周辺とテヘダ（Tejeda）村などを訪問した。コース中の農地では、先に示した作物に加え、小麦、ジャガイモ、葡萄等が栽培されていた。訪問先の農地は、その殆どが急傾斜および緩傾斜の段畑となっていた。加えて住宅用の土地も少なく、斜面を掘り洞穴状の家屋に住むところもあった。

フンカリジョ村には小さなホステルが1軒あり、そこを拠点に周辺を歩いて訪問した。近傍には、洞穴状の教会、洞穴状の村、急傾斜の農地、トウモロコシの製粉所などがあつた。村の雑貨屋は夕刻には繁盛しており、立ち飲み屋の役割も果たしていた。

近傍にはバスで訪問した。葡萄畑、ワイナリー、バイオレストラン（ベジタリアン食）もあり、ちょうどチーズフェスティバルが開催されており、チーズを試食し購入した。



テヘダ村は標高1050mの台地上の美しい村で、眺望が良く、多くの観光客を集めている。フランスで始まった「美しい村連合」のスペイン版に、カナリア諸島で唯一参加している。テヘダ村の農地は台地から谷に至る斜面に展開し、作物はジャガイモ（年2回収穫）、リュウゼツラン、アーモンド、穀物である。農地への移動のため、機械化以前はロバが貴

重な労働力であった。

4. 傾斜農地の将来

洞穴状の村も近年では土木工事によって平地に家に移す世帯が増えている。元の家は一部が家畜小屋として利用されているが多くは廃屋となっている。

一方、斜面の急傾斜農地の整備は行われておらず、放棄農地も増えている。多くの作物は、他地域・他国と競合するため、条件不利地域の補助金を受けても、今後の営農が困難であることに変わりはない。

今回のフィールドワークは天気も良く非常に快適であった。立ち寄った地域独自のワイナリーは、小規模ながら成功している。今後はフットパスを整備するなどし、観光農業を振興することに期待したい。

参考文献：

在ラスパルマス領事事務所「カナリア事情」2018

棚田学会発表会開催報告 棚田学会研究委員会

2019年 棚田学会発表会は、12月14日（土）13:00～17:30 立正大学品川キャンパスで開催された。発表は以下の6題、参加者は約80名であった。以下、各発表および総合討論の概要につき報告する。

発表① 棚田の存在価値をめぐる多主体の認識

～姨捨棚田を事例に～ 小島直也 楠本涼奈
(立正大学文学部社会学科4年)

この発表は、姨捨棚田を事例に、地元で棚田にかかわる多様な主体が棚田の価値をどう捉えているかにつき、現地での調査結果を分析したものである。この調査における主体として、1. 伝える主体：主に観光関係の人や組織、2. 支える主体：耕作者を支える行政、3. 売る主体：酒蔵や農産物販売店、4. つなぐ主体：地元宿泊施設、を設定した。また、棚田の価値としては、1. 棚田の魅力（景観と棚田米）、2. 棚田の多面的機能を掲げた。

調査の結果を総括すると、全ての主体が姨捨棚田の景観および歴史と文化を高く評価し、観光資源としての可能性は捉えつつも、具体的な経済効果を上げるまでには至っていない。棚田米については、宿泊施設などが安定した供給量や価格に懸念を感じ、積極的な使用がなされていない。多面的機能につい

ては、行政関係者以外の認知度は低い。今後の娯楽棚田の活用には、IT の利用も含めた積極的な PR 活動が重要であると思われる。

発表② 棚田活用プログラム「棚田でたんぼアート」～「ホワイトデーにお米をプロジェクト」を棚田でプロモーション～ 荒井菜月光 安立ひより 本田里美 新井菜月 戸丸ひなの 小野瑞歩 川上竜征 本田結莉 (群馬県立利根実業高等学校 食品文化部高校生)

真沢棚田(群馬県みなかみ町)の地元地区では、「さなざわ里山だんだんの会」が棚田を活用した古代米栽培や環境学習活動などを進め、群馬県立利根実業高等学校(以下、本校)もその活動に参加している。

米の消費減少が続く状況下、消費者アンケートから、贈答用米に需要拡大の可能性が認められたので、本校では平成 29 年度から「ホワイトデーにお米をプロジェクト」を開始した。贈答用であることを鑑み、「手ごろ感」や「見た目」にも工夫をこらし、平成 30 年には 300g/300 円(1kg/1000 円)で 210 セット販売できた。これと平行して、全国農業高校お米甲子園でプレゼンを行うなど、各地の農業高校にも呼びかけを続けており、このプロジェクトは全国的に拡大中である。

また、プロジェクトのプロモーションを目的に、だんだんの会の協力を得て、棚田で「たんぼアート(写真)」に取り組んでる。これらの活動により、真沢地域の活性化(リピーター獲得や観光資源として)が期待できる。



写真1 たんぼアート

発表③ ニホンジカの赤城山北西麓における生態・行動研究と玉原湿原におけるミズバショウ群生地の保護活動 横坂萌 千明芽生 堤梨乃 大竹葉津己 今井凜 立木愛梨 藤井千鶴 (群馬県立利根実業高等学校 生物資源研究部 高校生)

近年、野生動物による農・林地での獣害が全国的に深刻化している。群馬県立利根実業高等学校(以下、本校)の演習林がある赤城山北西麓(昭和村)もその例外ではなく、ニホンジカ(以下、シカ)による「食害」や「踏み荒らし」被害が甚大である。本校生物資源研究部では、演習林を中心にシカの生態・行動調査および玉原高原(沼田市)のミズバショウ群生地における食害防止試験を続けている。この発表ではそれらの成果が報告された。

生態・行動調査により、演習林におけるシカの年間行動サイクルの解明など、多くの成果が得られた。食害防止試験では、網目 10cm の防獣ネットの設置が大きな効果をあげ、ネット設置区域の内側にはシカの侵入が見られなくなった。ヒツジやヤギを使った実験でも、ネットが足に絡みつき動けなくなることから、全国の棚田地域で被害が拡大しているイノシシの侵入防止にも応用できると思われる。



写真2 防獣ネットの設置

発表④ 棚田地域における地名の歴史の意味～高知県における記録活動と村落景観復元～ 楠瀬慶太 (高知新聞社 棚田学会会員)

一般的に、棚田地域の魅力としてはその景観が注目されるが、この景観にはその地域の歴史が凝縮されている。その歴史を田んぼだけでなく、家・屋敷、畑、山林、神社・仏閣なども含めて総合的に理解すると、その魅力は倍増する。

この発表では、高知県梶原町神在居地域を事例に、中世以来の集落や棚田の形成過程を、地名を軸にした調査・研究で明らかになった結果が紹介された。

神在居の千枚田は江戸前期から明治初期にかけて段階的に拓かれたとのことであるが、その中で、小さな田んぼが集中している「大街(おおちまた)」が司馬遼太郎により「農業が築き上げた日本のピラミッド。万里の長城にも匹敵する」と紹介された、という逸話は特に面白かった。

また、高知県内でも棚田地域の過疎・高齢化、限

界集落化・消滅が進んでおり、地名をはじめとする歴史的資源を後世に伝えるため、実効性のある調査・研究が急がれることも強調された。

発表⑤ 都市と農村の結び直しから、自立した地域づくりへ 松川菜々子 (NPO 法人 かみえちご山里ファン倶楽部)

かみえちご山里ファン倶楽部の活動地域は新潟県上越市桑取川流域の、「海から水源山地」までを包括する中山間地域で、山と海の文化が混交する。活動の基本目的は地域の暮らしを守ることであるが、具体的には以下の理念に基づく。

1. 守る：伝統的な暮らしの知恵を記録し復元する。2. 深める：地域資源を時代の変化の中で合理的に再評価する。3. 創造する：地域資源の新たな組み合わせにより新しい価値を創造する。

活動する地域もご多分に漏れず、過疎化、高齢化、後継者不足など、活力の低下に直面しているが、関係人口を増やししながら、自立した地域・免疫力の高いコミュニティーの実現に向けて、明るい兆しも見えている（理念3の具体的成果）。

当法人の活動による地域高齢住民の健康寿命を伸ばす効果を試算してみると、冬期の道路除雪など、集落維持のための財政支出額の比ではない。日々の活動は「隠れた行政コスト削減効果」を生み出しているとも言える。

発表⑥ 台風15号による千葉県内の棚田地域における被害状況 向笠功一 (大山千枚田保存会 棚田学会会員)

観測史上最大級の台風15号は、9月9日に千葉県に上陸し、県内各地に甚大な風・水害をもたらした。具体的には、家屋の浸水・倒半壊、道路の崩壊、倒れた電柱や樹木による交通網の寸断、長期停電や断水など多岐におよぶ。

農業被害も甚大で、被害総額は400億円を超えると報じられている。だが、その被害は平坦地の農作物、田畑の浸水、園芸・畜産施設に集中している。棚田地域においても、小規模な畦畔の崩壊、倒木による交通障害、停電や豪雨による農作業の遅れ、稲の倒伏による穂発芽などの被害はあったが、棚田が立地する地形的優位性もあり、棚田そのものへの被害は相対的に小さかった。

台風15号に続き、19号、21号も続けさまに襲来したように、このような激甚気象災害は今後も続発することが懸念される。将来の気象災害に備える意味でも、棚田の存在価値が改めて見直される時代を迎えていると思われる。

総合討論：

(今回の発表会では、従来のパネルディスカッショ

ンに代えて、参加者一体型の総合討論を行った。司会・進行：上野裕治、小谷あゆみ研究委員)

総合討論では多くの参加者から、現地活動の状況やコメントなどがあった。その中でも、以下の2点については、特に注目された。

1. 棚田米の高食味的価値：

広く棚田米は美味しいといわれる。昼夜の温度差が大きいこともあり、棚田米が美味しいのは間違いない。一方、近年は各地域の栽培条件に適応する「高食味・高収量・高温耐性品種（例：新之介・新潟県）」の開発も目白押しで、平坦地や大規模稲作地帯の米は美味しくないと問われると答えは「否」と言える。したがって、棚田米の高食味だけに傾注した高価格販売には限界があるだろう。それぞれの地域を応援してくれるファン（関係人口）の増大は棚田米の高価格販売に欠かせないと思われる。

2. 各地域における棚田保全活動状況の相互理解の重要性：

棚田の保全は様々な活動主体により、全国各地で進められているが、種々の社会的、農業政策的理由などで、残念ながら中山間地域の衰退には歯止めがかかっていない。

一方、各地で進められている棚田保全活動については、他の地域でどのような活動が行われているかを、それぞれの活動主体が十分理解しているとはいえない状況にある。そのため、「自分たちはこんなに頑張っているが、他の地域の活動は低調だ！」という思いに駆られることがある。全国各地で無数の主体がその地域条件に合わせて懸命の努力を重ねているということを互いに理解し、「自分たちだけ・・・」という、視野狭窄的蝸壺に陥らないよう気をつけなければならない。

司会からの指名による参加者からのショートコメント

大坪史人（別府大学講師）：中山間地域の農業に関する研究を進める傍ら、学生の農業・農山村・環境問題などへの関心を高める目的で「夢米（ゆめ）棚田プロジェクト」を主導している。この発表会で高校生・大学生の発表を聞き、今後の活動に有効な多くの情報やヒントを得た。

村上公治（徳島県農林水産部副部長）：棚田・中山間地域の維持・活性化には、生産に重点を置いた農業だけでなく、多様な視点から政策や行政的支援が欠かせない。この多様な視点の重要性を改めて認識した。

石井竜也（立正大学卒業生）：学生時代、堀田恭子先生の指導による「姨捨棚田を事例とした社会調査実習」で、景観をはじめとする棚田の多面的機能に関心を持つようになった。卒業後も、後輩たちの棚田での米作り体験に参加している。（文責：安井一臣）

2019年 棚田学会発表会に参加して

立正大学卒業生 田中 未来

私が棚田に関心を持ったきっかけは、立正大学3年生の時に授業で行った社会調査実習である。堀田恭子先生指導の下、35名の実習生が長野県の姨捨棚田をフィールドに、「後継者問題と棚田米販売」というテーマを設定し、地権者の方々や行政、民間団体へ向けてヒアリング調査を実施した。実習自体は1年間という短い期間ではあったが、棚田の美しい景観に惹かれて、その後も和歌山県のあらぎ島や新潟県の星峠の棚田など、姨捨棚田以外の棚田にも積極的に足を運ぶようになった。

祖父母が農業を営んでいたため、幼少期から田んぼで遊んだり、田植え体験をしたりと、実習を行う前から私にとって田んぼは身近な存在であった。しかし、卒業して約3年経過し、棚田とは関係がない分野の企業で働く現在でも、こんなにも棚田に関わり続けるとは思ってもいなかった。正直、自分自身でも驚いているが、それだけ惹かれる素晴らしい要素が棚田にはあるのではないかなと思う。また、卒業後も棚田学会発表会に毎年声を掛けて頂き、棚田について考える貴重な機会があることも、私に関心を持ち続けている理由の1つである。今回も発表会に参加の機会を得たが、その際に棚田や農村地域に関わる人は皆、後世まで美しい風景を維持していきたいという強い気持ちがあることを再認識した。

そこで、今後、棚田やその取り巻く環境の保全に必要なことは何かを私なりに考えてみた。棚田に関わってからの日も浅く、まだ知識も乏しいが、実習経験と今回の発表を通して考えたことを述べたいと思う。

棚田を保全することの大変さについては、実習時に耕作者の方へヒアリングした際に、担い手不足や耕作放棄地増加など、簡単には解決できない問題を抱えていることを学んだ。保全活動をしていく中で問題は多々あるが、一番の課題としてはやはり担い手不足が挙げられるのではないかな。この課題を解決するには、まず官民が一体となり、現場の視点で連携することが重要だと考える。後継者の問題は地元農家の側だけで解決できるものではなく、行政や民間団体の協力が必要不可欠であると思う。特に、ハード面の整備は耕作者個人の力だけでは限界があるだろう。そして、棚田に足を運ぶ人を増やすこと（関係人口の増大）も、後継者問題解決の糸口とな

るのではないかなと考える。現地に来てもらうきっかけとして、観光PRや農業体験などのプログラムを企画することが、人を集めるための有効な手段として挙げられる。外部へ情報を発信することや、企画の計画をすることも、各関係団体の協力なくしては実現が難しい。各団体の協力が、中・長期的ではあるが、後継者問題解決の第一歩になると考えた。

棚田の魅力はまだ世の中に広く知れ渡っていないと感じる。景観の美しさという魅力があるにもかかわらず、その点を観光PR等に活かしきれていないことを姨捨棚田に行った際に実感したが、他の棚田へ赴いたときにも同様の思いを感じた。棚田が観光資源として認識・活用されていないように思う。例えば、観光客向けのガイドブックに棚田が観光スポットとして掲載されておらず、掲載されている場合でも、わずかなスペースに小さく載っているだけである。観光スポットとして大きく取り上げられている事例が少ないため、社会にあまり認識されていないのではと感じる。現代はインターネットという世界中へすぐに情報発信できる便利な媒体がある。今後、このようなツールを利用し、日本国内は勿論、世界中から美しい棚田、農村風景を見に足を運んでくれる人が増え、その結果としてファンが増えていくことを願う。

日本の棚田紹介

群馬県みなかみ町「真沢の棚田」

さなざわ里山だんだんの会 事務担当 林 正典

群馬県の一番北に位置するみなかみ町。上越新幹線で東京都心から1時間ちょっとで訪れることができる距離にもかかわらず、ここには日本を代表する貴重な自然が数多く残されており、谷川岳に代表される山岳景観や農村景観が広がっています。みなかみ町の最北端にある大水上山からはじまる利根川は、首都圏3,000万人を潤しその生活を支えています。みなかみ町の人口は約18,000人、町の9割が森林や河川であり、このすばらしい自然の恵みをいかした農業、ラフティングやスキー、温泉など観光産業が盛んです。みなかみ町ではこのすばらしい自然を町の最も大切な宝にかかげ、自然を守り、活かし、広めていく取り組みを進め、人と自然が共生

する持続可能な地域づくりに取り組んでいます。こうした自然環境と人間が共生しながらまちづくりに取り組むみなかみの姿は世界のモデルである、とユネスコから評価され、平成29年6月「みなかみユネスコエコパーク」に登録されました。

真沢地区は、19戸で区域の農地面積は約10ha。その内棚田が約2ha、アクセスは上毛高原駅から北へ3km、大峰山の東に位置した地形に集落・農地が形成されている典型的な棚田形態を有する山間地域です。農業は稲作を中心に根菜類の作付けを行っていますが、地形条件から市場への出荷には至らず、隣接真沢の森（宿泊温泉施設）道の駅月夜野矢瀬親水公園内に設置されている月夜野は一べすと（農産物直売所）を活用した販売が中心となっております。農地は棚田で道路も狭く、水路も土側溝であり排水不良といった生産性を阻害する要因が多くあり、これら維持管理作業により多くの労力が割かれていることから、耕作放棄地が拡大しつつあり、イノシシやサル等の鳥獣被害が多発し、高齢化・兼業化と相まって地域の生産意欲の低下を招いておりました。しかし、国県町から補助を頂き、区画整理2.5ha 農道整備延長1.6km・獣害電気柵約3km等の工事が平成26年度に完了しました。町は真沢地区と連携を図り、資源・伝統・文化を活用して近隣の都市・学校との環境学習及び交流が出来ないかと地域の話し合いの場を持ち、『さなざわ里山だんだんの会』を平成21年に発足しました。会議を『常会』と呼んで、常に話し合い、協力しあって、さまざまな活動を行っております。

地元桃野小学校と連携を図るため、当会役員・PTA役員・地元区役員・農地多面的機能活動役員・公衆衛生役員・群馬県利根沼田農業事務所・関東地域づくり協会・町農政課の職員が桃野小学校に集まり連絡協議会を設置し、桃野小学校5年生を対象に大峰学習・環境学習・総合学習の場として大峰山環境学習・真沢の森での宿泊体験・ピオトープを活用した生き物調査・竹炭の学習・石窯を利用したピザ作り等の環境学習及び食の学習を行い、平成23年から継続しております。また、平成24年から、利根実業高校食品文化コースの生徒にグリーンツーリズム・米の普及活動等の場として活用頂き、お米の消費拡大の取り組みとして、「ホワイトデーにお米を贈ろう」を全国の高校と連携して、今年からは4校と販売を進めるまでになりました。去年は棚田でお米マスコットの「お利根ちゃん」で田んぼアートを行い、米消費のV字回復に協力しております。令和1年12月には立正大学（東京・品川）で開催された棚田学会発表会で高校生が活動内容発表の場

を頂くこととなり感謝致しております。今後は棚田学会のお力添えをいただき、全国の農業系高校での米の消費拡大活動を推進して頂き、全国の棚田を守る活動に繋げていけたらと考えております。

真沢の一粒の米の輝きよ研げばシャワシャワ澄みし瀬の音（田村奈織美）

われの名は古代米です黒米ですさなざわ発の観光大使よ（筆者）



「古代米祭」のピザづくり
(だんだんの会 2019年6月2日)

事務局ニュース

◎ 2020年棚田学会現地見学会 開催予告

- ・日程：2020年7月11日（土）～12日（日）
- ・見学先：NPO法人山村塾、広内・上原棚田（福岡県八女市）、つづら棚田（福岡県うきは市）
- ・募集人員：25名 ・参加費：30,000円前後
- ・シンポジウム：災害と棚田の復旧活動について（予定）
7月12日午前中、うきは市民センターにて

◎ 2020年棚田学会大会開催のお知らせ

- ・日程：2020年8月22日（土）
- ・会場：東京大学山上会館（本郷キャンパス）

◎ 令和元年度石井進記念棚田学会賞候補者募集中

自薦他薦を問いません。ご応募お待ちしております。

前号（59号8頁）で早稲田大学名誉教授中島峰広氏のお名前を中島峰弘氏とご紹介してしまいました。ここに訂正し、お詫び申し上げます。（編集委員会）

棚田学会通信 第60号 2020年3月16日発行
発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagakkai@gmail.com